

先端的都市特別研究員（若手）の研究について

Introduction of the URP Special Researchers (Young, Leading Edge Urban Studies)

都市研究プラザでは、グローバル COE 拠点としての活動実績を継承し、自発的かつ国際水準の研究活動を支援することを目的として、国際公募による若手研究者の育成につとめてきた。現在、7名の若手研究者が在籍している。その研究内容を紹介する（順不同）。



■彌吉恵子

大阪生まれ。ニューヨークのマンハッタン音楽院演奏学部声楽科を卒業後、イタリアに語学留学し、現地の企業に就職。その後、フリーランスの会議通訳・翻訳家として独立し、現在に至る。高度医療

機関での通訳業務をとおして医療通訳に興味を持ち、2014年から大阪大学人間科学研究科博士前期課程において、イタリアの移民と医療者の間の言語・文化的仲介者たる「文化間メディエーター」を対象とした研究を行う。現在、博士後期課程において、移民や難民の診察にあたる精神保健従事者を中心に研究を進めている。専門は医療人類学、イタリア地域研究。移民を対象としたイタリアの精神保健の研究をとおして、他者理解のありかたについて分析を深めるとともに、日本でも「文化間メディエーター」を養成し、共生社会の実現の一助となることを目指している。

■池田千恵子

衰退地域におけるリノベーションによる再生とジェントリフィケーションなどによる弊害について研究を行っています。新潟市では、旧市場や商店街の空き店舗を再利用した地域再生の方策について検討しました。

また、ポートランド市パール地区に

おいては、歴史的建造物の活用から再開発に及んだ新築のジェントリフィケーションの兆候について検証し、現在は、京都市内における町家のゲストハウスへの再利用によるツーリズムジェントリフィケーションについて、都市地理学の観点で検討しています。2019年は、海外におけるツーリズムジェントリフィケーションについて、現地調査を行いたいと準備を進めています。



■アサダワタル

私の研究では、主に精神看護、障害者支援など、広く「ケア」や「支援」と呼ばれる現場において展開される「表現活動」の意義や可能性、その実践を通じてケアする立場の人たち—看護師、生活支援員など—の間で紡がれてゆく新たな「ケア・支援観」について、

その変遷過程を記述することを目的としています。

文化芸術を専門とする立場の私が関心を寄せているのは、ケアの現場で働く人たちの自身の仕事に対する「真摯に揺らぐ姿勢」です。患者や利用者である前にもはや「その人そのもの」と向き合っている」としか言い様がないメッセージを相手から受け取ってしまうこと。相手の人生の一端に生々しく触れた感触が消えることなく、職業的責任感のみでは整理できないような問いが胸中に渦巻いてしまうこと。そうしたとき、「ケア」を一体どこからどこまでの行為として捉え直せばよいのか。筆者はその答えを探るひとつのメガネとして、「表現」という営みは“使える”のではないかと感じ、研究を進めています。



■久谷明子

子どもたちが参加するまちづくりや地域活動を対象に研究を進めています。2013年に大阪市立大学の創造都市研究科修士課程に入学しました。当時は、大阪市職員として勤務しており、子ども施策や福祉、地域でのまちづくりに関する業務などを経験

(次頁に続く)

してきました。特に、子ども施策では、本局の企画立案部門だけでなく、ケースワーカーとして現場部門で個々の具体事例に関わってきたことから、まちづくりという課題に対し、子どもをめぐる環境や地域社会の変化も踏まえつつ、子どもと大人の関係性から捉え直す必要性を感じました。「子どもを含めた多様な世代が参加するまちづくりの構築が、持続可能な社会の創生に寄与するのではないだろうか。」このような課題認識のもと、子どものまちづくり参加を研究テーマとしています。これまでに、子ども政策のあり方に関する理論的かつ実践的の追求として、高知市や宝塚市の取組みを研究対象に博士論文を執筆しました。現在も、自治体職員としての経験を活かし、奈良市や泉南市など関西圏の自治体を中心に子ども参加の取組みについて研究中です。



■小泉朝未

芸術活動に様々な人が参加するアートプロジェクトを対象に研究を進めています。考察するのはマイノリティとされる人々の表現に関わる問題です。アーティストや他の参加者などプロジェクトにおける他者との関わりが、通常は抑圧されている表現や社会的なカテゴリーに

固定化されない独自の表現を引き出すことをプロジェクトの過程を記録しながら分析しています。他者との関わりの中で特に身体間の相互関係の変化に着目することで、身体に根ざした主体の表現経験を考察します。研究とともに芸術活動や対話の実践活動、アーツマネジメントへ参加も行っています。例えば子どもと詩を創作パフォーマンスするワークショップや、身近な風景の写真から社会で見えにくくされた存在を対話で確認するワークショップなどを試みています。(写真:筆者は右側)



■矢野淳士

都市研究プラザ特別研究員の矢野淳士と申します。2016年11月に大阪市内の被差別部落である浅香・加島・矢田地区が共同で地域課題を解決していくことを目的として発足させたまちづくり会社に勤務しております。この2年間、3地区のま

ちづくりに関わるなかで、部落解放運動の一環としての長い歴史をもつ被差別部落のまちづくりが、住環境などのハード面の改善だけにとどまらず、教育・就労・福祉等の向上も含めた包括的なものであり、それが現在のまちづくりの土台となっていることを実感してきました。そこで、現在は、被差別部落のまちづくりを社会的不利地域の再生の一つのモデルとして捉え、いくつかの地域の事例を教育・就労・福祉など多面的に評価することで、各々の事例から成功要因を抽出し、「社会的不利地域の再生モデル」を提示することを目的とした研究を行っています。



■松尾卓磨

大阪市立大学文学研究科地理学専修・後期博士課程1年の松尾卓磨と申します。現在私は「都市の包容力」をキーワードとして、大都市（ロンドン、大阪）内のインナーシティの住環境や地域変容を把握する研究を行っています。専門は都市社会地理学という分野で、その名の通り、都市を対象

とし、特に地理的特質に着目しながら都市空間内の社会構造やその変容について理論的・実証的に分析することを大きな研究の枠組みとして位置付けています。URP 特別研究員としての研究においては特に関西都市圏に立地している「飯場」に注目し、その飯場が有する暫定的な居住機能や地理的分布を把握することを研究目的としています。その上で、労働力の需給システムの中継地として、そして労働者の暫定的居住空間としての役割を担ってきた飯場を都市空間内の一種の「都市装置」としていかに位置づけられるのかということについて検討を進めています。

By succeeding the achievements of the Global COE Hub, the Urban Research Plaza dedicates itself to educate young researchers, through the recruitment of Special Researchers on an international scale, with the aim of supporting autonomous research activities with international standard. Currently, seven young researchers are enrolled in this program.

小円座「近世大坂の都市史研究の基盤形成 -史料・人・歴史像-

Roundtable: “Formulating the Basics of Urban History Research on Modern Osaka: Documents, People and Historical Perception



2018年12月16日(日)、三都研究会(基盤研究B「三都の巨大都市化と社会構造の

複合化に関する基盤的研究)、研究代表:塚田孝)の主催で、小円座「近世大坂の都市史研究の基盤形成 -史料・人・歴史像-」を開催した(URP共催)。

近年、三都(江戸・大坂・京都)を対象とした都市社会史研究は、町と社会集団への着目によって大きな飛躍を遂げ、三都の巨大都市としての共通性に注目するとともに、各都市の固有性や社会構造の特質を踏まえた比較・検討が可能な段階に至っている。しかし、1960~80年代の都市大坂の研究は十分位置づけられていない。そこで、今回は当時の研究の一翼を担い、熟知している内田九州男氏(愛媛大学名誉教授)に報告を依頼した。

報告とその後の質疑応答を通して、内田氏の当時の課題意識について理解を深めることができた。内田氏は、幕府権力の都市政策だけで都市の形成過程を説明しがちであった当時の研究状況を踏まえて、市街地形成の具体相と都市を構成する個別町や寺町といった諸要素を検討した。また併せて、大坂の周辺村落の町への編入や、墓所や被差別民の集落の都市周縁部への移転・形成といった、都市の拡大に伴う動向についても分析を進めた。こうした研究上の課題意識と連動して、当時勤務していた大阪城天守閣の学芸員として、大坂に関する基礎的史料の発掘においても中心的な役割を果たした。なお、これらの史料は、現段階においてもなお引き続き分析を進めるべき重要なものばかりである。

内田氏は、大坂の都市社会史研究の基盤を築いたと言えるが、それらの成果を、町と社会集団の複合構造を解明してきた今日的視点から位置づけ直し、再評価していくことが重要であろう

■吉元加奈美(日本学術振興会特別研究員(PD))

On 16th December 2018 the roundtable “Formulating the Basics for Urban History Research on Modern Osaka: Documents, People and Historical Perception”, organized by the Three Cities Research Group (Basic Research B, “Basic Research on the Three Cities’ Becoming as Megalopolis and their Emerging Complex Social Structure”, Representative: Takashi Tsukuda), was held. In order to discuss the direction of further research, at this roundtable Kusuo Uchida (Ehime University, Professor Emeritus) was invited as guest speaker. By reviewing the urban history research on Osaka from the 1960s to 1980s, an opportunity to study the development process of previous research was provided.

第8回オープンナガヤ大阪2018 The 8th Open Nagaya Osaka 2018

2018年11月10日(土)・11日(日)、大阪市立大学長屋保全研究会とオープンナガヤ大阪2018実行委員会は、大阪にある40以上の長屋の改修・活用事例を一斉公開する「暮らしびらき」イベント「第8回オープンナガヤ大阪2018」を開催しました。

本イベントは、大阪に多く存在する長屋に照準をあて、改修や活用を軸に研究を進めるなかで、大阪市内を中心に点在する長屋を会場として、年に一度「暮らしびらき」をテーマに実施するオープンハウスイベントです。

今年は、42の会場と2コースのまち歩きプログラムを行い、延べ4800人を超える来場者が住居・店舗・オフィス・工事途中など、さまざまな長屋の表情を楽しみました。メイン会場である都市研究プラザの豊崎プラザ(豊崎長屋)では、イベント全体を取り仕切るオープニング・クロージングイベントが行われたほか、2006年からの豊崎での研究活動に長く関わっている研究員による、豊崎長屋主屋の見どころ解説と周辺の路地を巡るツアーが開かれ、長屋に興味のある多くの人が参加しました。豊崎プラザの2日間の来場者数は昨年を大きく上回る259名でした。

生活科学研究科の大学院生が設計に携わった長屋「狭間ハウス」の内覧会では、来場者は生まれ変わった長屋の内部をじっくり見学し、デザインをした学生やオーナーの話を熱心に聞いていました。例年参加している会場にも暮らしと共に変化している部分があり、同じ長屋でも今年ならではの新たな一面を見ることができました。大阪市内のみならず、東大阪市、柏原市からの参加会場もあり、大阪長屋の保全・活用の広がりを感じることできる2日間となりました。

■行田夏希(大阪市立大学生活科学研究科修士2年)



豊崎プラザの
当日の様子

On 10th and 11th November 2018 the Osaka City University, Nagaya Preservation Research Group and the Open Nagaya Osaka 2018 Executive Committee held the “8th Open Nagaya Osaka 2018”. This exhibition exposed living spaces, focusing on examples of renovated and under use nagaya, to a wider public, through 42 venues and two field trips. In sum over 4,800 people participated, enjoying all kinds of nagaya, that were utilized as housing, shops, offices, or just under renovation. Especially the main venue, the URP Toyozaki Plaza, enjoyed high popularity. During the two days here more than 259 visitors were counted, far exceeding last year’s number.

都市創造性コラム

都市生態と文化創造：阿倍野から広域的ネットワークを構築する
(村野藤吾と中野操の事例から)Urban Ecology and Cultural Creativity: Constructing Broad Networks from Abeno through
Togo Murano and Misao Nakano

村野藤吾(1891-1984年)は1918年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業後、大阪の渡邊節建築事務所で経験を積んだのち、1929年には阿倍野区阿倍野筋に自己の事務所を設立し、天王寺駅から事務所への途中に居を構えた(現在は八尾の友安製作所の展示室兼カフェとして使われている)。

代表作には「照起(てりむくり)屋根」(唐破風)を36個配した旧大阪新歌舞伎座(難波、1958年)などがあるが(上本町の新歌舞伎座には無数の照起(てりむくり)屋根が配される)、綿業会館は渡辺節のもと、村野自身が設計した。村野は、『資本論』をはじめ、経済学や会計学へ大きな関心を持ち、旧制の大阪商科大学および大阪市立大学教授であった木村和三郎による『減価償却論研究』(1947)を愛読していたことは注目できる。これは設計事務所を運営する村野が、戦後、建物の減価償却実務の理論的基礎を迫及し、マルクスの労働価値説を減価償却実務に援用した木村教授の理論に共鳴していたことが読み取れよう。

医師であった中野操氏(1897-1986)は、大阪における医学の権威として国際的に知られている存在である。京都府に生まれ、京都府立医専(現京都府立医大)を卒業後、陸軍軍医から日赤大阪支部病院に勤務をへて、戦後、周防町で開業し、後に阿倍野晴明通に移った。自宅も阿倍野区松崎町から晴明通に移され、医療活動につとめる傍ら、昭和13年、医学普及のため杏林温古会を設立し、機関誌『医譚』の発行や『増補医事年表』の編纂、『大阪蘭学史話』の執筆など、大阪の医学史研究に邁進された。中野の蔵書には天文21年(1552)の『黄素妙論』など室町時代に遡る医学書、1733年オランダ刊の『セウユリルスフラーカコンスト』を蘭方医新宮涼庭(1787-1854)が写した日本最古のオランダ文法書、江戸時代大阪の医事年表のほか、『医譚』編纂に関する資料など、日本医学史上比類ない歴史資料である「中野操文庫」(13461点)として2014年に大阪市の指定有形文化財に指定された。

中野は、出身は京都でありながら、大阪で開業し、大阪の医学の歴史研究に生涯を捧げられたが、その動機を探ることによって、阿倍野の創造性に接近できるであろう。『大坂名医伝』のあとがきにおいて「大阪に住んで半世紀以上、生を受けた京都以上に愛着を感じる大阪」あるいは「第二の故郷、大阪」と記すなど、大阪への愛着を述べられている。中野に直接インタビューされた榎原氏によれば、「権力に反発し、自

己の力のみをたよりにすべてを切り開いて来た大阪町人の不屈の意気に先生が心を惹かれたわけであって、先生の御性格がその学問の針路を決定した」と述べている。(詳細は岡野浩(2018)『都市生態と文化創造：阿倍野から広域的ネットワークを構築する』大阪市立大学都市研究プラザレポートシリーズNo.43を参照されたい)。

■岡野浩(Hiroshi OKANO)URP教授(経営学研究科兼任教授/City, Culture & Society (CCS) マネジニグエディ(Emeritus) / Creativity, Heritage & the City (CHC) チーフエディター

The architect Murano Togo (1891-1984) learned the architectural design practice at Watanabe Setsu's Architect Studio in Osaka, after he had graduated from Waseda University's Science and Engineering Department. At the same time, he founded in 1929 an independent office at Abeno Road in Abeno Ward, and took up residence between the two places in Tennoji ward. Beginning with Karl Marx's "Capital" he had much interest in economics and accounting, reading also enthusiastically the "Depreciation Theory Research" (1947) of Wasaburo Kimura, a Professor from Osaka City University.

The doctor Misao Nakano (1897-1986) is internationally recognized as an authority on medical history in Osaka. While Nakano was born in Kyoto, he opened his business in Osaka, and devoted his life to the historical research of medicine in this city. His love for Osaka is expressed in statements like "living over half a century in Osaka, I have more love for it than for Kyoto where I was born" or "Osaka, my second hometown". Details can also be found in the following publication.

Okano, H. (2018) Urban Ecology and Cultural Creativity: Constructing Broad Networks from Abeno, Osaka, Osaka City University Urban Research Plaza Report Series No.43..

URP

Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が2006年4月に設立した全く新しいタイプの研究教育組織です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。先端的都市研究拠点として、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138 tel.06-6605-2071
e-mail : office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp
所長 阿部昌樹 副所長 全泓奎 林久善

大阪市立大学都市研究プラザ ニュースレター 第42号
編集長(発行責任者) 阿部昌樹
副編集長 全泓奎 水内俊雄 岡野浩
編集主幹 鄭榮鎮 波床尚美

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp>

CCS スコア (2019年1月1日現在)

- CiteScore: 1.31
- Source Normalized Impact per Paper (SNIP): 0.789
- SCImago Journal Rank (SJR): 0.617